

泥棒とイーダ

第09回 夢の醒め際

牧田真有子

授業中の「ながら体操」が功を奏しているのだろうか。柿森先生は克明な形のふくらはぎで教室前方をゆっくり横断し、引き締まったウエストを捻^{ひね}って一列ごとにプリントを配布した。相変わらず枚数を間違っている。私はまたもやこの人が担任するクラスに振り分けられたのだった。新しい教室の窓からは、中庭の柳のやわらかな色が見える。

「皆さん春休みは楽しかったですか」

大半の生徒が無反応な中、おとなしそうな新任を氣遣って一人二人が返事をしかけていたが、柿森先生自身がさっさと次の話題に移った。

「このところ学校付近で、不審な団体が生徒を勧誘する事例が多数報告されています。皆さんの中に、声を掛けられたって人、いますか」

厚化粧の巻き髪の子が、含み笑いでけだるそうに挙手した。私はプリントの端を精密な幅の蛇腹に折っていた。担任は巻き髪を促した。

「どんな人にどういうことを訊かれました？」

『自分を支えているものはありますか』って。適当に話を合わせてたら、『僕たちと一緒に村を作りませんか』とか言ってきたから逃げた」

私は手をとめ、蛇腹を凝視した。担任はおੱとりと言った。

「適当に話を合わせたのはどうしてですか？」

「ださいけどよく見たら相当いい男だったから」

その子が余裕たっぷりと言い放つと、まわりがげらげら囁^{はさ}し立てた。新学期らしく名簿による席順だが、偶然仲のいい人たちが前後左右に固まっていたらしく、クラスで最も賑^{にぎ}わっているブロックだ。言われてみれば室本^{むろもと}は、身なりにさえ構えはもてるかもしれないが、それどころではない。高校付近でのピラ配りなど以前はしていなかったはずだ。若者

が多いイーダ会でもメンバーの大半は大学生以上が占めている。室木もセツとは違うやり方で新規会員を獲得しようとしているのかもしれない。予め自分に共感してくれる人を見定めて会員にすれば、セツへの牽制^{けんせい}にもつながりうる。

「でもさあ、もしその集団のコンセプトに共感しちゃったらどうしたらいい？」

巻き髪の後ろの席から、額の広い、勝気な顔立ちの女子生徒が担任に言った。顔はにやついているが奇妙に集中した目つきだった。声の小さい担任は間を置かずに言った。

「共感しちゃった自分自身について、ほんとによく知っているか、一度立ちどまって考えてから判断したらいい」

去年の晩秋、これ以上自分のことばかり思いたくないと言った私にも、この人は「思わなくていいから知りなさい」と言ったのだった。チカは頼杖^{ほろづえ}をついて楽しそうに担任を眺めていた。チカとは同じ組になり、史^し乃^のはずいぶん離れたクラスだった。願ってもない配置替えのはずだし、実際チカとは「あらまほし」と小躍りしたけれど、内心は平らではなかった。今朝の史乃による唐突すぎる和解は何だったのだろうか？ それに、彼女には借りが残っている。

担任は大音量のくしゃみでホームルームを締めくくった。机に突っ伏して舟をこいでいた沼男^{ぬまお}が、何かの襲来と間違ったような緊迫感で顔を上げるのが、数列おいて目に入った。

街のあちこちで白昼堂々と起こる超常現象みたいだ。桜の満開を見るとそう思った。どこか遠いようなピンク色が満ちて浮かんでいた枝々に、今は緑の葉が茂り始めた。

目録〈Ja〉の利用は会員たちの間で定着したらしかった。顔見知りの情報をわざわざネット経由で探ることに抵抗感がある、と言っていたメンバーは後日私に、「その人自身に邪魔されずにその人を知るのって新鮮」とにこやかに言った。「特に依頼したいことも思いつかないのに」

と当初ぼやいていた人は、「自分の側で予め要望を具体的にしておかなくてもいいの。カタログめくるみたいに眺めてるうちに、そういうえぼくいうことをしてもらえたら助かる、とか思いつくから」と考えを変えた。

室木が以前私に話してくれたとおり、口にこそ出さないが目録化に漠然と抵抗を感じている、それがメンバーの総意のはずだった。私もその透明な厚みを肌で感じていた。もちろん今も、まだセツによってあちこちカバーされているぎこちなさがあるし、個人レベルでは釈然としない気持ちを抱えている人も少なくないと思う。にもかかわらず、その総意は表立って取り沙汰されることがないまま、ゆつくりとひとりでに変わ容していくようだった。そしてこれまでメンバーではなかった人たちが、パスワードを持つ匿名の身体でぞろぞろと加わってくる。共有された、顔のない沈黙の中身は流れつづける。

このことは、セツと佐原^{さばら}さんの大恋愛を抜きにすると成立しなかったイーダ会からの脱却を意味しているみたいに思えた。セツの目は、イーダの姿を、もうどれくらい捉えているのだろうか？

四月最後の日曜日、洗濯物を畳んでいたら目黒^{めぐろ}さんから電話が掛かってきた。今ショッピングセンターの大型手芸用品店にいるから出てこないかという。理由というものが、好きなだけ省略されている。午後の青空のした私は自転車をとばした。

目黒さんは奥ゆかしい表情で店の入り口の真ん中に立っていた。スモッグ型^{もめん}の木綿ブラウスは薄い水色で、レモンイエローの幾何学模様の刺^し繍^{しゅう}が施されている。見る人に有無を言わさぬ瑞々しさだ。同じラインの服が欲しくなって私はブランド名を尋ねた。目黒さんは自分で作つたのだと不安げに言った。そういえば〈Ita〉の彼女のリストには特技として手芸が挙げられていた。

「依頼は多いですか」

「いや、手芸サークルかと思うほど特技欄かぶってて。それでサービスの形を特化しちゃえば目立つかなと思ってるんです。一緒に『鱗^{うろこ}』の意

匠を刺繡しませんかっていうのを、自己紹介欄に加えようかと。最近入会した私たちや遠方の準会員だと、実際の刺青^{いれずみ}までは躊躇^{ちゅうちよ}する場合が多い。でも話を聞いてると、しるしが欲しいとは思ってるみたいで。私は刺繡が得意だから、発注者が好みのパターンで作れるようにするのはどうかなって」

そういう提案型はまだ誰のリストにもないという。どうやらこの相談が、私を呼び出した理由らしかった。すごくいいと思う、と私は言った。目黒さんは浅いため息をついた。それから、何種類かサンプルを作った画像をアップするのだと憂い顔のまま辣腕^{りつわん}をふるいだした彼女のうしろについて、柵から柵へ歩いた。可憐なレースやボタン見本を妥協のない表情で吟味する女性客たちの背後を通り、繊細な光をみつしり纏^{まと}ったピーズの瓶詰めの羅列に幻惑されていると、目黒さんがぼそりと尋ねた。

「どの青が、イーダの体のイメージに近いですかね」

豊富な色数の刺繡糸が陳列されているコーナーに来ていた。彼女の掌^{てのひら}はすでに、ブルー系の階調から幾束^{いくたき}か掬^くっている。その範囲から外れたところに『無題』そっくりの色があった。私はそれを指さしかけて、やめた。青ですらなくてもいいかもしれない、発注者に思い思いの色を選ばせるのはどうかと私は言ってみた。彼女は小刻みにうなずいた。

一人一枚の刺青の鱗が集合した姿、遠い理想の像として、あのやきものは最初期にはメンバーの心に訴えただろう。でもおそらく目黒さんたちは盗品のことを知らない。何より、イーダのイメージを『無題』に限定することはきつともう不可能だ。

レジ横の白木の柵には、手芸関係のサークルのビラ、個展を知らせるポストカード、フリーペーパーの類いが所狭しと並べられていた。

「渡会^{わたらい}さんのとこが出してるやつじゃないですか、これ」

目黒さんはフリーペーパーの一つを手にとった。見開きの「強化月間」のスケジュールは、パソコンですっきり仕上げられる昨今にあっては物騒に感じるほどの手書き文字で、私の筆跡である。複製して貼紙以外にも使っていいかと渡会さんから言われてはいたが、実際に目にする

と半分ひとごとみたいだ。

「渡会さんの手も亜季^{あき}さんの手も離れて、これが街のあちこちで知らない人たちにもらわれていくなんて、そのときはもうイーダ会のくくりとか関係なくなってるなんて、なんだか広々してて結構です」

目黒さんは目の前の現象をおごそかに称えた。

五年ほど前の熱帯夜、街で偶然佐原さんを見かけたことがある。

駅舎のごく周辺だけは辛うじて盛り上がっている駅前通りが、執念深さのグラデーションを経てずっと静寂に飲みこまれていくあたりに、そのチェーン店のレストランはあった。一階は駐車場のみで、あとは巨大な電光の看板が立つ花壇しかない。居間で大喧嘩^{おおげんか}中の両親の目を盗んでアイスを買いにきた私は小学生だった。コンビニから出ると見覚えのある背中がレストランの前を歩いていた。私は駆け寄ろうとした。でも佐原さんがその花壇のそばで静止したのにつられて、立ちどまった。眩しい看板は汗ばんだ彼をじっと照らしていた。空き店舗を二つ挟んで、私もやはり汗だくで彼を見つめた。花壇には向日葵^{ひまわり}が咲いていた。顔だけ横へ向けた彼はしかし、花を愛でるというよりも何かを探すような表情をしていた。花壇に何か落としたのだろうかとつさに思った。けれども実際に身を屈める様子はない。なぜ自分がそこで立ちどまったのか、その理由を探しているような、張りつめながらもうつろなまなざしだった。私はとうとう声をかけそびれた。

フリーの校正者としてようやく生活基盤が整った頃だと思う。それまで佐原さんは職を転々としていた。当時は、社会人を装った無口な彼を誕生会に迎えるだけだったから、熱心にキャリアアップを図る野心家という両親の評を鵜呑^{うの}みにしていた。例外的に長続^{ながつづ}きしたのが三駅先の出版社だった。それでも毎朝の乗り物酔いを苦にとうとう退職願を出したところ、在宅での校正の仕事を回してもらえなくなったのだと後に俊子^{としこ}さんから聞いた。その会社は、狼藉^{ろうぜき}の結果としてではなくふつうに辞められた、最初で最後の勤め先として、彼の黒い年表に華々しい書

体で綴^{つづ}られているという。

物心ついた頃から私は彼をとびきりの善人と思い込んでいた。だから半狂乱で人助けしている姿を目撃しても自分を納得させることができた。熱帯夜の路上に見かけたときのような、小さな謎をふくんだ光景こそ、記憶の底で溶け残った。

けれどあれはもう謎じゃない。駅前通りのレストランで佐原さんが見ていたのは、夜だというのに一斉に咲いている向日葵だった。花卉と触れあう近さで発光する看板を太陽と間違ったのだろう。店は二十四時間営業だ。向日葵からは夜というものが奪われつづける。佐原さんは、自分が一つの契機を見落としていただけ察知していた。道行く人に丸つきり背を向けて咲く、その花の置かれた状況はつかみきれないまま。

ネオン消してくれよと店員に直談判する、あるいは店員の目を盗んでスコップ片手に植え替えるといった所業に及んだらそれはやりすぎだ。一個人の身勝手を超えている。植物をめぐる歪^{よこしま}んだ状況が、あるべき姿に回復するとしても、そのとき傍^{はた}目には彼の身が誤^ご謬^{みゆ}になっている。

汗でうっすら光る彼の横顔にあったのは、佐原さんという個が、佐原さんと向日葵との混合物に超えられる寸前の表情だったと思う。隔たりを前提とする「共感」など彼にはないとセツはいうけれど、やはり超えられていく個としての彼はいる。

そんな、いるのかいないのかの確認が必要な人を、本当に好きになっ
てしまった。

この間チカから「彼氏のどんなところがいちばん好き？」と訊かれた。チカの認識では二人はもう半年近く付き合っているのだ。佐原さんが断腸の思いで私の提案を受けて立っただけの、やみくもな関係であるという事実を、彼女に言い出せないままきてしまった。

首が肩になっていくところ、と私は言った。

部位かよ、とチカは笑った。私も自分の返答に耳を疑った。

「十三も年上なんでしょ？ やさしい、落ち着きかたが半端ない、高いもの買ってくれる、おいしい店知ってる」

片手の指を折りながらチカはあげつらった。

「変だな一つも当てはまらない」

私は動揺をひきずりながら言った。チカは私の掌にある携帯電話を顎でしゃくった。その人の写真ならいよと応じると、目を丸くされた。会社勤めをしていない佐原さんは襟付きの服をあまり着ない。首が肩になっていくところ。その線を私はありありと思い浮かべることができる。人と比べて上質なわけではない。「身勝手に拡張しすぎて輪郭のぼやけた佐原さん」から、「体どりの大ききの佐原さん」がするりと現れるとき、上質になる。隅から隅まで弟として俊子さんの懷妊を祝福した声。私の勝手な落ち込みをいなすような苦笑。私が思わず目を上げると肩がある。彼一人分の歴史を、世界中の誰とも比較できない質で背負っている彼の肩が、灰明^{ほの}るいどうしようもなさ^{なさ}を宿している。その人の名前を呼びたいような気持ちにさせる。

『代表こんばんは。皆のように陰口をたたけません。嫌いではないのだから。博愛主義者だと嫌味を言われますが、好きでもないです。その場で人格を使い分けなくてもいいところにいきたかったです。』

でもここに来ると私みたいな人がたくさんいて、自分を客観的に見てしまった。人を愛せるようになるとか方便を使えるようになるっていう、同次元での克服じゃなく、そろそろ新しくならなきゃいけないのかな。』

『代表こんばんは。ここにいる実感が希薄なのは、私がもう、イーダの一部だからでしょうか？ そうであればそれはもう悲しいことじゃない。私はそこに、みなさんとともにいますか。代表には私の姿が見えますか？』

生活指導部から、学校付近での勧誘行為に関して二度目の通達があった。室木に伝えなければと私はようやく思い当たった。連絡先を知らないで放課後に佐原さんのアパートを訪ねることにした。

電灯の点いていない部屋で、卓袱台ちゃぶだいの赤いノートパソコンの画面だけが発光していた。そのすぐ下で手枕てまくらのセツがうたた寝している。私は腰を下ろして彼女が起きるのを待った。眠っているわりには落ち着きのない寝顔だ。それでいて全く呼吸をしていないように見える。私はだんだん心配になって肩に手を置き、耳のそばで「セツ」と控えめに呼んだ。セツは短い息をいくつも束ねたような、ほとんど無音の叫びをあげて目をさました。

「具合でも悪いの？」私は尋ねた。

彼女は重たげな声を出した。「いや、こわい夢を見ただけ」

セツでもこわい夢を見るのかと、不謹慎だけれど私は少し笑った。起き上がった彼女も、痺れているらしい右腕をだましだまし伸ばしながら、疲れたように笑った。私が室木への伝言を託そうとすると、セツは彼の連絡先を覚えてくれた。

「亜季が直接言ってあげて」彼女は途中であくびを挟んで言った。「私の口からはあんまり聞きたくないだろうから」

携帯電話はすんなりつながった。室木はさほど驚かなかった。

「実はさっきあるメンバーから同じ忠告を受けたばかりなんだ。亜季の学校に迷惑を掛けるつもりはなかったんだけどな。そんなに警戒されるとは。ありがとう、気をつけるよ」

同じ通達を聞いた、私と同じ高校に通う生徒の誰かがイーダ会の中にいても、ふしぎはない。匿名で登録していれば、あるいは実名でも私が目録から削除された後での入会であれば、私は気づけない。

部屋の電気を点けたのはこの日もハイイロだった。彼は玄関に立ったまま私たちを見下ろし、大きな声で尋ねた。

「代表のお帰りはいつごろでしょう」

「わからないな。迷子を警察へ届けた帰りに、道に迷ってるのかもしれないですしね」

セツは言った。またもやスイッチを消して出て行くのかと思ったが、ハイイロは靴を脱いだ。セツは私のほうを向いて言った。

「代表って行動範囲が狭いから、その枠内からはみだすところとちょっとやそつとじゃ帰れないんだよ」

「知ってる」と私は性急に言った。それはいかにも軽く、私だけが知っている佐原さんの姿を錯^{いかり}として足さずにいられなくなった。

「最近の佐原さんってときどき、血の通った人間みたいなきがあると思わない？」

画面に顔を向けたまま、セツは「昔から蚊には狙われてたけど」という皆さんの返事しかくれなかった。私は構わずに佐原さんの話をつづけた。ハイイロは我関せずといった態度で、台所の窓を薄く開け、米櫃^{こめびつ}のそばの小さな脚立^{きょだつ}に腰掛けて文庫本を読み始めていた。次第に私は彼の存在をあまり気にならなくなっていった。私はこのとき無意識に、「亜季との関わりが深まるにつれ、あの人なりに澄んだ心持ちが現れるようになったのだろう」という言葉をセツに期待していたと思う。でも彼女はなかなかその言葉を与えてくれなかった。私は言い募^{もつ}った。喋りながら何の気なくセツ越しに台所を見遣ると、ハイイロがこちらを見ていた。私は、不注意でドンとぶつかってガラスの水を零^{こぼ}すように、視線を零しそうになった。細くひらいた窓からもややと風が入っていた。ハイイロに背を向けているセツが前ぶれもなく私の方へ顔を向けた。

「あのさ。あの人は亜季への思い入れによって個としての自覚を取り戻しつつあるのでも何でも無い。天井を突き破るような自分の拡張に疲れ果ててついていけなくなって、ときどき天井からぼとりと落ちてくるだけ」

セツは卓袱台へ落ちてきた小さな佐原さんにとどめをさすかのように、天板を叩いた。私は思わず歯を食いしばったので何も言えなかった。頭の中で色のない旗が思い切り翻^{ひるがえ}っていた。セツに嫉妬してどうするんだか、と明るくドライに考えてみようとしたが絶対無理だとすぐにわかった。私はトイレを借りた。出てくると室木がさっきまで私のいた場所に座っていた。A4の紙束の端を卓袱台でとんとんと揃えている。

「電話、ここから掛けてくれたの」

身なりに構えばもてるらしい室木が顔を上げて言った。私は頷いて言った。うなず

「それってもしかしてブログの」

「そうそう。『代表くんばんは』の投稿。いくらかまとまった段階で代表に校正してもらってる。今日はそのお願いに来たんだけど、留守じゃ仕方ない。ハイイロ、悪かったね。確認してから言うべきだった」

最後は台所の方へ向かって発せられた。脚立のハイイロは顔の前で手を小刻みにはっきり振った。室木からその予定を聞いていた彼は、イーダ会での唯一の仕事にとりかかる代表にお茶を運ぶため、待機しているのかもしれない。セツがやわらかな声を卓上に延ばした。

「室木さんそれっていつくらいまで続けます？」

「投稿の校正ってこと？」

「じゃなくてブログ自体」

所作をうつすらこわばらせた室木にセツは言った。

「最近のあれは度を越してるでしょ。彼らは求めすぎだし、私たちは放置しすぎだし」

「互いに自己責任だっていうのは暗黙の了解なんじゃないのか」

「かつてはね。いつのまにか向うはそれから手を離れます。会を一足飛びにして『代表』の方に責任が固まってきてる。彼にはもちろんなんにもできないけど、私や室木さんじゃあの人の代理は務まらない」

室木は少し意外そうな顔をした。セツは畳み掛けた。

「代表は、ろくでもないけど、どこにしようがそれがネット上であろうが、たしかにある種の人間に対するつよい引力を帯びるんですよ。私もあなたも、現実的にはもう彼なんか不要なはずなのにずるずるとそばにいるのは、その引力の結果ってだけじゃなくて、人の集まりを一から自分で作るより早いからっていうのもありませんか」

「わかった。代表に関する情報の更新は今までどおりつづけて、代表へのメッセージよりも会レベルでの交流に主眼を置いた投稿にしてもらえるよう少しずつ理解を求めたらいいんじゃないかな。ブログ自体をなく

すっていうのは乱暴だろう。数集めにだけ利用して、目標達成の見通しがついたとたん、それを本当に必要とする人のことは見捨てて切り上げる、そんなふうに見えるな」

たしかに彼女は、何ごとにつけ「中止」はしなうと言っていたはずだ。セツは室木に微笑みかけた。

「あれのおかげで色んな人と出会えたことはたしかです」

「でも彼らから代表を取り上げてしまっていることだろ、セツがしようとしてるのは」

「代表を取り上げられたら困るような人たちを量産しつづけたって仕方ない」

かちつという音がした。文庫本を読むには手もとが暗くなりすぎたらしくハイロが流し台の電灯の紐を引いたのだった。蛍光灯は痙攣するようにならなく明滅し、消えた。蛍光管は台所の隅で工具箱などと並んでストックされている。活字に限らず佐原さんはまめに直す。色々な種類の螺子やドライバーを周りに侍らして部屋の不具合を修繕する姿は何度も見た。ハイロは着々と蛍光灯を換えた。点滅したとき揃ってそこらを見た卓袱台の二人は、疾うに話し始めていた。

「Ida」への導入部としても必要だし、もちろん会のサイトは残しておけばいいと思います。でも中身は最小限でよさそうな気がする。会の趣旨と、活動内容と、村の構想と、目録の利用案内くらい。そこで何かを傍観してもらったり、一方通行の意見を受け入れたりするんじゃない、イーダの構成要員になってもいいんじゃないから」セツは言った。

「あのさ、セツは何でも自分一人で進めようとするけどね、」

「ずっと気がかりだったんですよ。代表に向かって内面を吐露して一人で完結しちゃうあんな形式がでてくるなんて、ブログを始めたときは想像してなかった。双方に実害があるわけじゃないから、落ち着くところに落ち着くのを待ってたんです。でも逆だった。見誤りました」

非を認めるセツの声音は、他のときと何ら変わらず淡々として一定だった。聞いている室木の方が、間違い探しの絵を急に差し出された人み

たいに、まとまりをなくしたのがわかった。喉が渴いて仕方ない。こわい夢からさめたとき、セツの息は乱れていた。

「亜季はどう思う？」彼女は急にこちらを向いた。

「この子は」と室木がセツに言いかけ、「いいから」とセツが私に言った。理由は不明だが、おそらく自惚^{うんぼ}れではなく、彼女は私を鼻^{ひいき}真^ましい。それを他のメンバーに隠そうともしない。セツの目にはきつと、私の中で翻る旗が映っているはずなのにな、と私は思った。そんなものは彼女にとっては取るに足らないものらしい。喉がからからの私は、何度か喉の奥で小さな咳をしながら言った。

「私は少し前まで、命の恩人の佐原さんを自分の根拠にしていた、でもそれはだめだった。途中までしか行けなかった。『代表くんばんは』やってる人たちも同じように、彼を歪んだ形で特別視してるから、はらはらする。私のときは、私一人分のダメージだったし、実際の佐原さんとは何人いるのかすらわかんない。向うの期待だけが高まって、摩擦もなく先へ先へいつてしまつて、だけどそれに応えられないとき佐原さんはどうなるの。裏切られたらその人たちは……ごめんなさい、まだ全然そうなるなんて決まってるじゃないけど」

「いいんだよ、わかつてる。だからこそ今回の目録をうまく進めたい」そうセツに言われて私ははっとした。彼女は佐原さんに「慈悲」を見る人たちに對して、どう解釈しようが彼らの自由だと捉えている。そのセツが、彼らの受け皿としての面をも目録化にもたせようとしていたなんて、知らなかった。それはいつからなのだろう。ツアーの団体客にまじるようにして「行き先をそれとなくずらしていつちやおうと思つてる」と私に言った、去年の十二月の晩の軽やかなセツを思い出した。彼女も変わっているのだ。イーダを変えながら、イーダに変えられ続けている。セツだって彼女自身が含まれているイーダの姿を客観視することはできない。

「私はあの人たちとずっと手ごたえのある形でつながれないかと思つて

る。代表へのメッセージって、たいていは悩みや愚痴ぐちと一緒にたってるでしょう。返事をしないっていうルールを破って励まそうかと何度か思ったけど、いざとなるとそんな言葉って私の中になくてね。それよりも、悩みを実際に解消できるかもしれない場を提供した方がいい」

セツは言った。室木はいつのまにか両手で筒状に巻いていた紙束を天板の上で延ばした。

『世界が好きになれない』『暮らしを続けていく理由を見つけられない』。そういう悩みを、即解決してあげられるような『特技』や『資格』や『趣味』をもってる会員がいれば、の話だろう。僕が見る限りではロシア語会話とか簿記二級とか編み物とかだけだね」

「代表に漠然と許しを求める人って、自分で自分を許可できないからそうしてるわけでしょ。読んできると彼らの多くは、やりたい仕事に就けないとか何が好きなかわからないと言ってる。少なくとも〈Idea〉では自分のやりたいことで人の役に立てる。色んな人のリストを繰っているうちに、忘れていた、好きだったことを思い出すかもしれない」

「そのケースに該当しない人だってたくさんいる」

「今までの、一種の居心地のよさを奪うことになるのはわかっています。でもイーダ会サイトで自分の位置を実感して、『このままではいけない』と思っている人もいないわけじゃない。この頃、そういう流れがフツと表面化しそうになるのを感じることはありませんか」

「そのケースに該当しない人だってたくさんいる」

室木は繰り返した。むしろさつきよりも自信のある表情だった。セツは言った。

「でも早くしないと消えちゃう。そういうのって」

どこかの部屋で夕食の支度が始まり、使い古されたような油が匂った。新しい油よりもいい匂いだな。文庫本を膝ひざに伏せたハイイロが「お茶でも淹れましょうか」と言った。唐突な上にもものすごく大きな声だが、たじろがされることはなかった。蛍光灯の点滅する音にすら台所を一瞥した二人も、あやうく聞き流しそうになっていた。彼の大きな

声は彼の大きな声の中でぴたりと閉じられている。もしかしたらここではないどこかで、響き渡っている。

ハイロが慣れた手つきで淹れてくれた玉露を私はちまちまと飲んだ。洗い出されたようにすっきりした味のなかみは、どこまでも緻密^{ちみつ}だった。猫舌の佐原さんは文机の端でさんざん冷ましてからひどく無造作に飲み干してしまうのが常だ。

佐原さんとハイロの分の湯呑みは、伏せたまま塗り盆に置かれている。七時をすぎても佐原さんは帰宅せず、解散となった。

いつせいに開発されたこの新興住宅街では、時間の濃淡が模様を刻まない。「ひと昔前の新築」に一面埋め尽くされている。似通った風貌^{ふうぼう}の家並みにひっそりと個人商店がまじる。七時半になると半額に踏み切るパン屋の内に、仄^ほかな人だかりと苦い笑みを浮かべる中年の店主の姿が見えた。室木の連絡先を聞きに行くだけのつもりが、すっかり帰宅が遅くなってしまった。自転車から降り、片手でハンドルを持ったまま門扉を開けたときだった。

「なあ」

真後ろから突然声をかけられた。すばやく振り返ると、佐原さんだ。どうしたらそこまで甘さのない表情を浮かべられるのか、どちらかといえば見る人を油断させるタイプの私としては一度こつを尋ねてみたいいつもの面持ちで、突っ立っている。彼は乾物屋のビニール袋に包んだ何かを差し出した。薄い白の袋から透ける中身は春雨でも昆布でもない。数冊の通帳とキャッシュカード、それに印鑑だった。私はしばらく考えながら一応念を押した。

「俊子さんの代わりに管理しろってことだね？」

彼女があれ以来弟と没交渉でいることは、ドラッグストアのレジで本人から聞いていた。自分のおおよその月収、家賃、水道光熱費、社会保険料、住民税、息子のための積立金などについて佐原さんは説明した。

「俺にはまとまった金を渡さないように」顔色は悪いが姿勢のいい佐原

さんが、ずばりと言った。「姉は一週間ごとに分けて食費を寄越してた」
「わかった、同じようにする」

自転車を立て、取り出した通帳を開くと、子ども一人くらい養っているような風格の数字が並んでいた。「息子の将来のために」という觀念に手綱たづなを引かれている弟の将来のために、俊子さんが守り抜いてきた額だ。

私は顔を上げた。みんなで佐原さんの帰りを待ってたんだよ。あなたはいつからここで待っていたの。どんな返事を聞いても、今このとき以上の際立った感覚はたぶん得られないだろう。佐原さんに信用された。そのこと自体が、体のなかに飛び込んできたあざやかな鳥みたいだった。セツは幾重にも見抜く。でも終局的には私と佐原さんにしか見えない層も、あると思った。

「息子にとってだけは自分の死は瑕疵かしだって、佐原さんは言ったけど、私にとってもっていうことを忘れないで」

私は言った。通帳の包みをかばんに仕舞う手がふるえそうに緊張していた。佐原さんは厳しい表情で私を見るだけだ。応答らしいものを読みとれないかと私は目を細めたが、何しろ信号を見ているときもその顔なのだ。まっすぐ等間隔に街灯が並ぶ無人の道を佐原さんは引き返していった。夜テレビを見ているときも翌朝登校するときも、彼の乾いた声や全く根拠のない威厳は度々よみがえって、私をなんだかありがたい気持ちにさせた。同じくらい、こわい気持ちにもさせた。あざやかな鳥がぶつかるように飛び込んでくるあの瞬間の到来を、私は望むようになってしまった。もし待ちきれなくなったらどうしたらいいのか、それを知らないことが妙にこわかった。

史乃は顔を合わせれば挨拶あいさつを寄越すようになった。あまりにも長く互いを無視しあった結果、彼女が本格的に私を人違いしだしたのかとすら思った矢先、「亜季は連続で柿森先生だね」と的確な認識を示されてしまった。我々の「濁にごった交流」を知っている元同級生が、やや、という

視線を送ってくることもある。しかしあれほど露骨に濁っていた時期の私たちにも介入してこなかった人々だから、無論今回もしぶとい。沼男は変なところで好奇心に負けて「わけを聞かせろ」と迫ってきたが、私のほうも和解の経緯をのみこめていなかった。だいいち和解とは言えない。史乃が、私とではなく何かもっと大きなものと和解したから私との過去もご破算にした、そんな自動的な繰上げの印象だった。

久しぶりにイーダ会サイトをひらき、最近のブログを何気なく覗いて一つ一つの投稿に目が留まったのは、それからまもなくのことだった。『はじめて投稿します。ピラをもらってから、気になっていました。』

昔、すごくこわい人が教室にやってきたことがあります。その人を追放するチャンスはいくらでもあったのに、私たちはその人の機嫌をとってばかりいました。その挙句みんなこわいことに巻き込まれました。でも偶然私だけは免れました。偶然なんです。私だって何一つ逆らえず、誰のことも庇わなかったのに、私だけが罰を受けなかった。まるで手品でした。本当のことと思えなかったです。だから終われませんでした。ショーのあとで手品師が種明かしをして帰ってくれるわけではないのと同じです。

でも私はもう観客席にいたくありません。私は、わけのわからない世界の側に就きたいです。真実ではないことが、種も仕掛けもなしに、真実として通用していくこと。罪の一部分になってしまえばもう、罪悪感を持たなくていいんですよね？

今度、そちらに伺います。』

この春休みの日付だった。史乃なのか、と思った。高校の近くで行われていたという勧誘活動。問題が大きくならないうちにピラの配布を控えるよう、私に先んじて室本に忠告したのは、彼女かもしれない。

あれ以来教室でイーダ会への注意が喚起されることはない。一度だけ蒸し返したのは、始業式後のホームルームで「もしその集団のコンセプトに共感しちゃったらどうしたらいい？」と担任に訊いた、賑やかな女子グループの一人だった。その放課後、彼女はめずらしく仲間と一緒に

いなかった。当番で残っていたのだ。自分の受け持ち分を仕上げたらしい彼女は、もう一人の当番で学級日誌をつけている沼男に「まだあ？」と高く声を掛けた。沼男は彼女らともすぐに打ち解けた。彼は言った。

「まだ。居眠りしてた数学の授業の内容を、丹精こめて捏造中」ねつぞう

彼女は「だめだ起きてたけど覚えてない」と言いながら彼の前の空いている椅子にがたんと腰掛けた。亜季は？ と沼男は列おいて少し後方の席の私を振り返った。「寝ていたか起きていたかも覚えてない」と私は言った。私は図書室に行ったきりのチカを待っていた。

広い額の女子生徒は、量るような目で我々を見てから言った。

「先生が前に言ってた怪しい集団ってイーダ会っていうみたいだよ。ネットですらしちゃった」

サイトで知ったイーダ会の活動を、さも可笑しげに列挙していく。それでいてその表情には余裕がなく、今にも彼女の顔から飛び立って沼男の平板な顔にはりついてしまいうさそうだった。前回も、弛緩した雰囲気しかんを装いながらくいこむような目つきをしていた。

聞き終わると沼男は「乗っ取られるのは趣味じゃないんだよね」と彼女に言った。私はできるだけ控えめな声で彼に言った。

「よく知りもしないのに洗脳集団みたいに言うのはどうかな」

「ちがう、そういう意味じゃなくて」沼男はこちらを振り返った。「俺らって一時エココンシャスで鳴らしただろ。あのとき、こっちがやられちゃうこともあるのかなと思う一瞬があったわけよ。エコとか、善いこと全般に」

彼女は氣勢をそがれたような顔で「もう、冗談言ってるのに、なに真に受けちゃってんの？」と彼に八つ当たりした。「真に受けるのが趣味なんだよ」と沼男は言った。

ちよつとした歯車がかみあえば、彼女だって入会したかもしれない。

佐原さん宅に赴くのは、一週間分の生活費を渡すときに限られつつあった。これがもし私の稼ぎにかかっていたりしたら大問題だが、今のと

ころ専ら運び屋だ。一階のビーズ暖簾のおばさんがこちらへ放つ視線はとげとげしさを増した。最近アパートの空き室をまた一つ埋めたのはやはりイーダ会のメンバーだった。

明るい灰色の雲に覆われた静かな日曜日、佐原さんは部屋で通話中だった。片手で携帯を持ったまま畳の上を裸足でうろつき、いやそうに指先で段ボール箱を開けて「おう」とか「ある」とか「調子に乗るんじゃない」とか言っている。電源を切った彼に聞くと、手作り市でパンを売っている室木からの、忘れ物を届けてもらえないかという連絡だったらしい。この人に頼むのだからよほど人手のない日なのだろう。

「一緒に行っている？」まだ靴を履いたままで私は言った。

「そうか、時間あるんだったら頼む」

拒絶と依頼の渾然一体となった塊がすべるように返ってきた。彼はガムテープを千切り、小ぶりのダンボール箱を軽く封じて紙袋に収め、玄関のそばに運んだ。しゃがみこんだ私は、文机にすたすた向かっていく彼の背中に訊いた。

「佐原さん、史乃っていう子、知ってる？」

「長村史乃なら四月から何回かここに來てる」

私は、短いガムテープをべりつと剥がして箱を開けた。

他の静けさとまじり合えない、私の沈黙に、佐原さんが振り返った。

「皮膚に貼れるんだと。ハイイロが用意したって」

無造作に詰められていたのは鱗文様のシールだった。紺の線で刺青が細やかに再現されている。台紙一枚につき一つの、「刺青」の山に、掌をざっくり差し込んで掬った。

「でも発案したのは長村史乃だ」佐原さんは呟いた。

「え？」

「会員を増やす手立てを室木たちが話し合ってたとき、『お試し期間』を設けたらどうかと横合いから言い出して。ビラとシールをセットで配って、実際に貼ってすごしてみるように勧めるんだと。もし少しでも普段とはちがう感覚で世界にいられたら、その人は会に興味をもつ、つ

て」

学級討議ではきはきと提案する彼女の声を、いくらでも思い出せた。私は靴箱の上にお金を置いて出発した。

彫り師が持つ針の先、皮膚の下に入ってくる色。セツや佐原さんがどれくらい歯を食いしばったのか、室木がどれほど自分を励ますために心の中で歌ったか、私には推し量れない。鱗の刺青は、入れているその人に見られるとき、その人を見返すような感じがした。

バスに半時間ほど揺られ、公園に着いたのは正午を回った頃だった。露店が立ち並ぶ広場はメタセコイアの並木を抜けたところにある。波に洗われて白い、流木を使ったオブリジェや、ハンドメイドのアクセサリーに気を取られながら雑踏を縫った。イーダ会がパンを販売しているブースではベビーカーを押す夫婦がじつくりと品定めしていた。横からよれよれの服のおじさんがいくつか手早く掴んで店番に突き出す。商品台を挟んで人のいい表情で接客していた室木の目配せで、私はテント内のパイプ椅子に紙袋を置いた。それからしばらく、途中で調達したマンゴージュースを飲みながら園内を見て回った。

なまぬるい風が吹いていた。人波を掻き分けて笑いながら走ってきた女兒が、私の太腿にぶつかっても懲りずに駆けていく。私は小さくあつと言った。彼女の手の甲には刺青型のシールが貼られていた。すぐに追ってきた、鬼ごっここの鬼の方らしい少年の手にもそれはあった。刺青をちらつかせつつ思想的なスタンスを説くあのビラを、手作り市で配付するわけにはいかない。だから今日はパンのおまけとしてシールだけ渡しているのだろう。何かの都合でマイクのスイッチが入ったらしく、園内アナウンスを流すベビーカーからしばらく大きな無音が聞こえており、やがてボソツと消えた。

イーダ会のブースに戻ると室木が若い女性客に身振り手振りで夢中になって話しかけていた。商品説明にしては興奮しすぎなのでナンパ中かもしれない、私は迷いながら近づいていった。女の方も乗り気なのがわか

る口ぶりで、意気投合している。パンの数は順調に減っていた。

「いらつしゃい、安全で環境にも配慮したパンいかがですか？」

我を忘れた室木にそう言われたらさすがにショックだが、私に声をかけたのは女性の方だった。パンの袋を抱えていて、メンバーではないようだ。佐原さんと室木と同じく三十前後だろうか。似合わない格好をする人だなというのが第一印象だった。体育の授業で買わされるような素朴な黒ジャージのセットなのだが、その下に活発で筋肉質な体が詰まっている気配はなく、色白で、黒髪は束ねず肩に垂らしている。

「いや、この子は会員というか、関係者で」

室木が朗らかに言うと言わぬ彼女は私に訊いた。

「刺青入れてるん？」

私が首を振ると彼女は「ほな」と肘を掴み、私のシャツの袖を捲り上げた。私はたいてい手首のボタンを外している。彼女は片手で器用にシールを剝がし、とっさに振りほどこうとする私の二の腕の内側に貼った。唐突な敏捷さだった。私はまじまじと彼女の顔を見た。どこにも難がなく、片目が一重瞼でもう片方が二重である以外これといった特徴もない。

「関係者って何なん。マスコットガール？」

彼女は楽しそうに言った。私は腕の内側に爪を立てて小さな黒い文様を剝がした。鱗のシールは私に覚悟を問わない。それには私が見えていない。室木が口を挟んだ。

「彼女、村づくりの構想にすごく共感してくれてね」

「ほんまにいいと思う。ボランティアとかしてるせいか私よう人から相談されるねん。自由なはずなのに緊張してしんどいって。『自分の精神を支えているのが自分の精神だけ』ゆうことの痛快さを味わう気になってくれたら話は早いんやけど。でもその村で暮らしたら気の持ちようが楽になりそうな人らを知ってる以上、私にも手伝わせてほしいなあ思て」

今しがたの沙汰とは打って変わって落ち着いた声音だった。私はふとひるんだ。急に彼女がまっとうな人間を装ったせいではなく、装いだと

思えなかったせいだ。先の向こう見ずな関わり方にも今の話しぶりにも、異様なほど、ごまかしの匂いが混ざっていなかった。室木は、かつて私が反射的にすがりついたくなかったあの優しい顔をしていた。

「そんな手伝うなんて言い方しないで、一員になってほしいな。イーダを成す鱗の一枚に」

「私自身には別に要らへんから。でも必要な人がいるのは知ってる。そやし、私にできることがあったらさしてもらいます、ゆうてるやん」

「うん、ありがとう。今度皆に紹介するよ。そこで話し合えばあなたにもイーダのことがもつとわかってもらえると思う」

私はシールの残骸ぞんがいを指で丸めた。来たときよりも美しくというスローガンと心中しそうな室木は、私が足もとに捨てたりしないうちにそれを取り上げ、ゴミ箱に捨てた。見ていた女は白い喉を反らせて笑った。

〈続く〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）

80年生。「椅子」で「文藝界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」（「群像」09年5月号）、「予言残像」（「群像」10年6月号）、「今どこ?」（「WB」20号）、「合図」（「早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの『距離』」）、「動物園の絵」（「早稲田文学⑥」）など。

早稲田文学・オン・ウェブ

copyright by Makira Mayuko 2013

published by wasedabungaku 2013